なぜ被災地に行くのか
―ソーシャルワークの歴史を踏まえて―

立教大学　コミュニティ福祉学部
松山　真

講義の内容

１，阪神淡路大震災での経験

２，理論的枠組み

１)ソーシャルワーク　２)岡村理論　３)マズロー

３，東日本大震災での活動

１）学部一組織・ネットワークつくり

２）ミクロからメゾ・マクロの実践

３）いのちの尊厳のために・豊かさとは何か

４，陸前高田サテライトキャンパス開設準備

阪神淡路大震災(1995/1/17)

日本医療社会福祉協会社会活動部長として

- 視察（神戸市長田区・灘区）
- 仮設住宅サロン主催の後方支援活動
- 復興支援ニュースの発行と募金

1，空爆の跡のような焼け野原の街を歩いた衝撃は忘れられない
2，仮設住宅で撮影した1枚の写真から、写真の大切さを実感

2002年から神戸市兵庫区に4年住み、長田区で生活
長田区は20年経っても人口は2／3、空き地が目立ち、巨大な商店街は廃墟となりつつある。 復興はしていない

震災と復興を直接見て、肌で感じた体験は大きい

神戸市長田区菅原市場付近　96年8月



理論的枠組み

１，岡村理論（社会福祉の理論）

２，マズローによる欲求段階説

３，ソーシャルワーク

震災に対する社会福祉的理解

岡村重夫理論

1，人間の基本的欲求

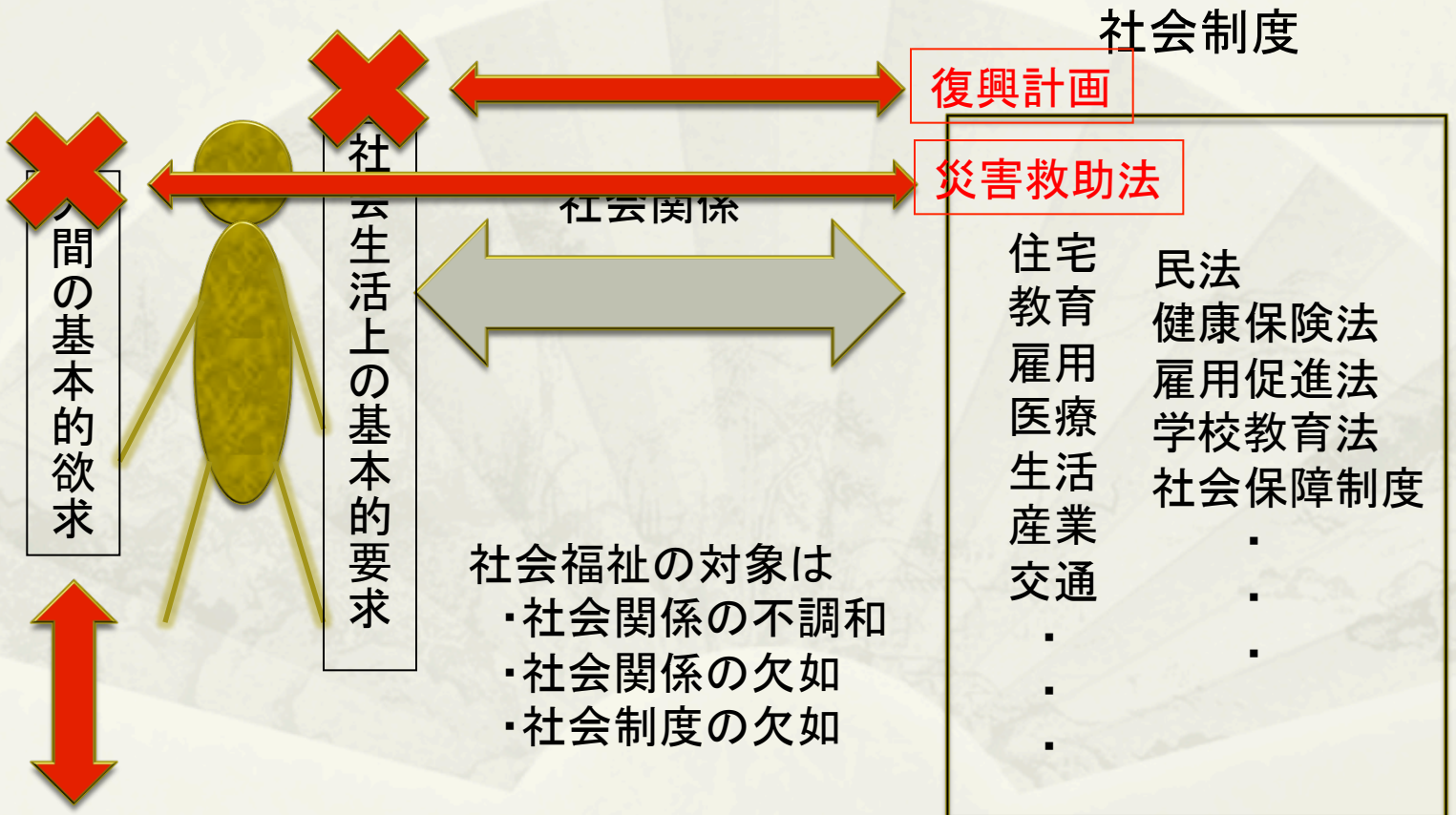
1)生理的欲求　　栄養、睡眠、呼吸、排泄、休息、性欲、身体的活動
2)安定の欲求　　愛情、帰属
3)自信または独立の欲求　　達成、独立、社会的承認

2，人間の社会生活上の基本的要求

1)経済的安定要求
2)職業的安定要求
3)家族的要求
4)医療の機会の要求
5)教育の機会の要求
6)社会参加の機会の要求
7)文化・娯楽の機会の要求

社会生活とは、この「社会生活上の基本的要求」を充足させる過程である
これらの要求を充足するためには、それぞれの要求にふさわしい社会制度を利用しなければならない。
個人はこの社会関係を通路としてのみ、生活上の要求を充足することができる

震災に対する社会福祉的理解



欲求充足の方法

1，個人的に充足

個人資産、親戚・友人・近隣

ボランティア

大量に・短期間で行うため
役割分担・量的充足困難

2，社会的に充足

社会保障制度をはじめとした法制度の活用

行政や公共事業

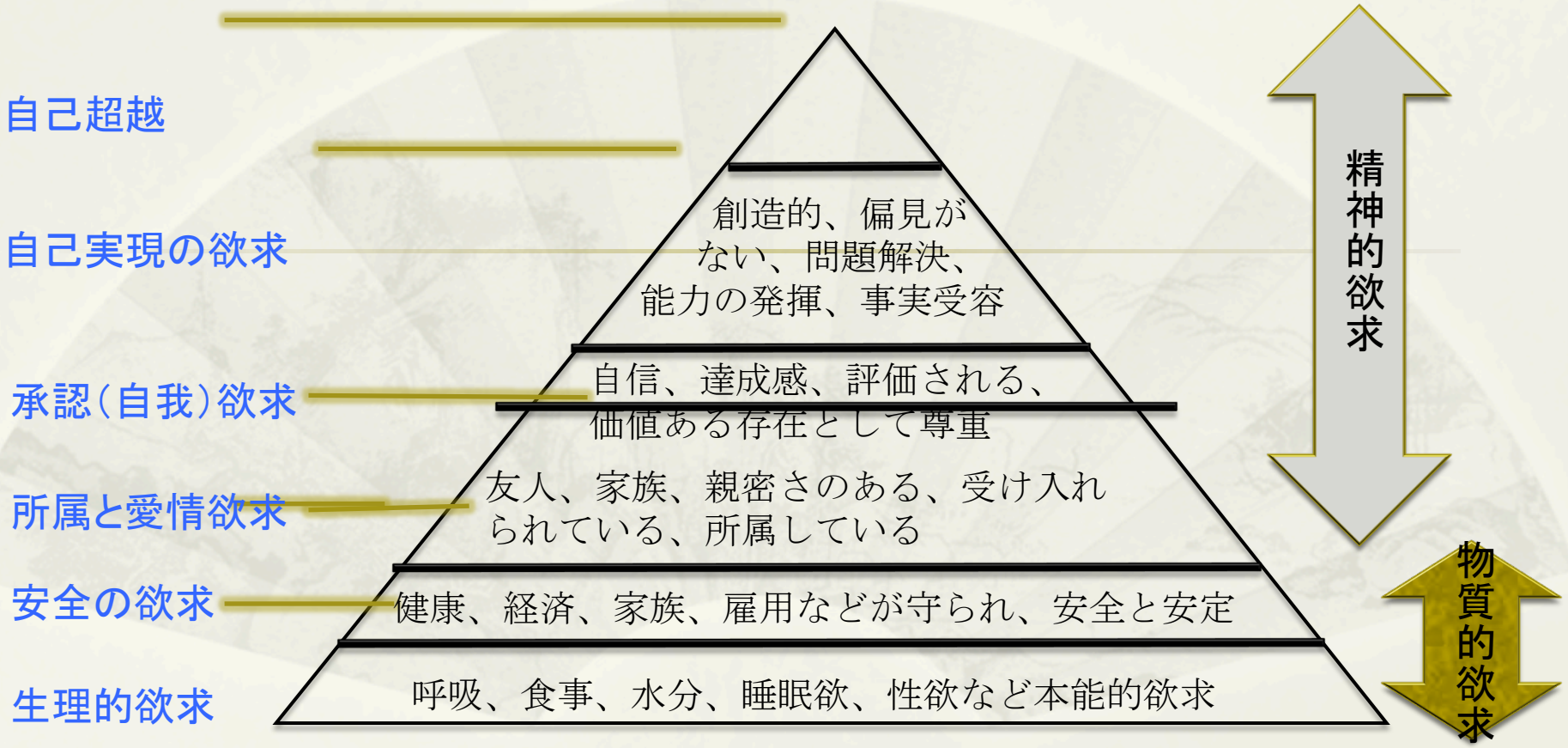
ここを担当出来る・すべき

立教大学　コミュニティ福祉学部　松山　真

震災で人に起きたことの理解

マズロー(A.H.Maslow:1908-1970)の欲求段階説

階層の下にある欲求が、少なくとも部分的に満たされてはじめて、より高次の欲求が、「動機」として意義を持つことになる。



あらゆる欲求が急激に・大量に阻害され、急速に充足する必要が生じた

立教大学　コミュニティ福祉学部　松山　真

東日本大震災での活動

Pre活動-生活の状況を把握する

* 4/6-16、仙台市若林体育館に専門職ボランティアとして参加（のちに陸前高田に繋がる）

* 仙台市の取り組みについてヒアリング
* 石巻：個人で回る
* 郡山：ビックパレット（３０００人）視察。ソーシャルワーク三団体の会長と会議
* いわき：医療チームに同行し、避難所（南台小学校、いわき高専など）を巡回

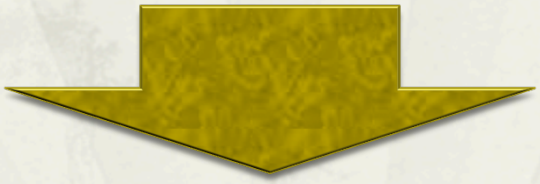
仙台市荒浜（避難の方々が住んでいた地域を知る）





震災に対する
コミュニティ福祉学部の考えと行動

* 学部の専門性を生かした活動を展開したい



・力仕事ではない
・学部の力量に見合う支援地域（コミュニティ）を選定する
・特定の地域に、今後5年から10年というスパンで交流していく



荒浜から仙台市市内を望む



専門職チーム

活動先「若林体育館」



活動のための組織つくり、基盤整備

* 阪神・淡路大震災時、ボランティア・コーディネーターを経験した教員が中心に行動
* 2011年4月13日に「学部復興支援プロジェクト」立ち上げ

組織つくり

活動目標と期間を定める
活動できる組織をつくりあげる
資金を獲得する
人材を確保する

学内体制の整備

- 復興支援推進室の設置（スペース）
- プログラムコーディネーターの雇用
- 財源の確保
  - 学部から活動資金拠出
  - 大学教育活動推進資金に申請・採択
  - 大学研究推進資金に申請・採択
  - 外部助成団体に申請・採択
  - 自動車などの物品寄付

学部　復興支援プロジェクト

コミュニティ福祉学部は、

　そのコミュニティの再生に向けて、3学科の知見を結集し、学部全体としてその支援に当たることにした。

　教員・学生共に、長期的プランを立案し、継続的支援体制を学部内に確立することを目指している。

　単にボランティア活動を行うのではなく、今後長期（5年以上）に交流していく地域を定め、あらゆる形での支援と交流の方法を探っていく

支援活動の考え方

活動は、「短期」「中期（数ヶ月単位）」「長期（数年単位）」という時間軸と、「キャンパス内」「近隣地域」「被災地」という活動場所を定め、それぞれにおいて活動計画を立て、教員と学生が主体となって活動していく。

	短期	中期	長期
キャンパス内	◎	◎	◎
近隣地域	○	○	○
被災地	○	◎	◎

支援体制(学内）

長期的にしかも安定して安全に活動を進めるためには、**学内と活動地域においてそれぞれのニーズや力を見極め、活動を調整・促進するコーディネーターが欠かせない。**

そこで、まず学内にプログラムコーディネーター（PC）を配置し、キャンパス内・地域における活動を先行して開始する。

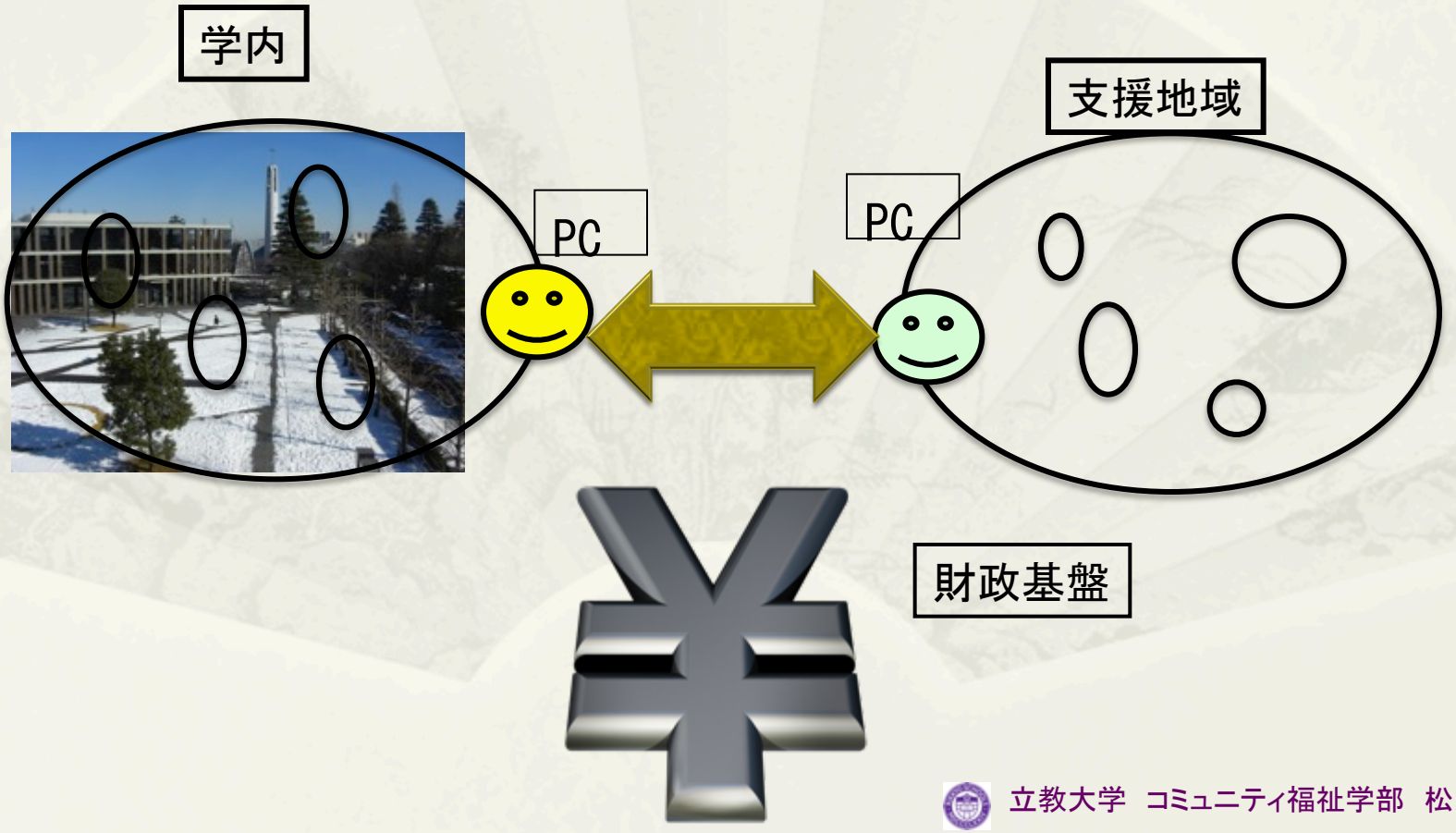
支援体制整備（学外）

交流・支援先となる地域を選定し、活動拠点を形成する。

活動拠点が決定したらその**支援被災地域にコーディネーターを配置し、学内とのパイプを形成**していく

支援のための基盤整備

こうして学内と活動先内のネットワークを結び、その関係の中で活動内容を検討し、活動していく。



活動地選択基準

- 学生が安全・安心して活動を継続できる
- 現地のニーズを把握し、適切に繋げられる

教員が、それまで形成していたネットワークの活用と、専門的実践を通じて
いくつかの地域に活動拠点を形成していった

活動の現状

学生登録（累計） 1，085名

活動地

気仙沼大島　石巻市　陸前高田市

南三陸町　　いわき市　　東久留米　新宿

活動回数　244回

活動参加者（累計）　3，003名

学生2365名、スタッフ401名、教員229名

ソーシャルワークの方法

（旧分類）

ケースワーク	個人
グループワーク	集団
コミュニティワーク	地域
アドミニストレーション	機関・施設
ソーシャルワーク・リサーチ	社会調査
ソーシャルアクション	制度・法律

ソーシャルワーク前史

友愛訪問（慈善活動）　友愛関係を持ち物資を届ける

セツルメント運動　　生活を共にすることによりニーズを把握する

松山の活動

陸前高田での活動について

ソーシャルワークの専門性に沿って解説します

ソーシャルワーク全部を実践してみたかった

2012年度に、1年間の研究休暇を申請し、陸前高田市に借りることができた家に住み、地域を把握し、ネットワークを広げ、活動する。

友愛訪問・セツルメント運動・専門家としての活動　　全てを経験してみたかった

学部・陸前高田サポートハウス



2011年8月から2015年10月まで、家財道具付きで無料で利用させていただいていた

4月の仙台でのボランティアの関係が発展した

主な活動内容

ソーシャルワークの方法別に分類　　(陸前高田のみ)

ケースワーク（個人）	市役所職員・派遣職員個別相談、
グループワーク	学生を引率してプログラムの実施
コミュニティワーク	ネットワークの構築（ネットワーク会議、保健医療福祉未来図会議など出席、関係団体訪問）
アドミニストレーション	職員研修、自殺予防対策庁内連絡会、新任職員オリエンテーション内容改正 学部プロジェクトの運営・管理
調査	仮設住民避難状況聴き取り調査
ソーシャルアクション	陸前高田市自殺予防対策要綱作成、『ノーマライゼーションということばの要らない街づくり』監修
その他	医療・保健に関わる国の通知を解説・要約しソーシャルワーカーに配信・HPにて公表 保育所卒園文集復刻版作成（4保育所、102年分、1786冊）

ソーシャルワークは結果では無く方法を重視する

「何をしたか」ではなく、
「どのようにしたか」が重要

例：卒園文集復刻版の作成・配布

・高田・今泉保育所　園舎も街も全て流されてしまった。
・「子どもの写真、親の写真、思い出の品が欲しい」

４つの園の44年分合計1860冊
「今泉保育所の歴史50年間」を500冊　そのまま復刻する

保育所修了記念文集復刻について

2012年6月、保育所所長さんから「修了記念文集を復刻できないでしょうか」と相談を受けました。数冊の修了記念文集を見せて頂きました。

その中には、子どもの溢れるような笑顔、将来なりたい仕事をたどたどしい覚えたばかりの字で書いた文章、お母さんが子どもの名前の由来を書いたものもありました。

明るく元気な笑顔が生き生きとし、担当の保母さんが思い出をたくさん詰めて時間を掛けて丁寧に作られた文集でした。

どのページを開いても、生き生きとした子どもの様子が伝わってきます。わたしは誰とも会ったことはありませんが、この文集の持つ意味を考えた時、涙が出そうになりました。

写真が一枚あれば、一枚の写真を見れば、すっとその時に戻ることが出来ます。写真によって記憶が呼び起こされて、当時の思い出が鮮やかによみがえってきます。写真にはそれだけの力があります。この文集を手にする方々が思い出を取り戻し、少しでも、こころの復興に役立つことができればと願っています。

2013年3月27日

立教大学コミュニティ福祉学部　　松　山　　真

卒園文集復刻版発行までプロセス

卒園文集の収集　＝保育士さんたちが声を掛け合い流されなかった文集を集める

印刷　＝都内の安い印刷所でなく陸前高田市内の印刷所で（助成団体と交渉）

配布　＝「保育所に取りに来て貰い、思い出話をしたい」という保育士さんの希望

街が消滅してしまったが、自治会が全員に手渡ししたいという希望

ソーシャルワークの姿勢：「人々のために」ではなく「人々とともに」

プロセスが重要（2）

陸前高田交流プログラムで毎回同じ魚屋さんを訪ねている。

・魚当てクイズ、捌き方を教えてくれて、楽しませてくれる

訪問する　→手紙を書く・写真を送る

→再度訪問する




2011.11.21


2012.01.09








東北油機
シタ商店



共に悲しむ　　共に喜ぶ　　同じ思い出を持ち語り合う

豊かな生活

「帆立は食べる？」「勿論！」　「じゃあ取ってくるから」　「えっ？取ってくるって？」　　仮設の店舗から見えるところに壊れたままの防潮堤があり、その向こう側の地盤沈下した岸壁に帆立を吊してあるのだという。軽トラでさっと取りに行き、5分もしないうちに大ぶりな殻付きの帆立がジャラジャラと20枚ほど運び込まれる。その一枚を手に取り貝の隙間に小さい包丁を差し込みカキカキと貝柱を切る。パカッと開いた帆立の紐を指でなぞってはずして、大ぶりな帆立が現れる。それを包丁で二つに切り、貝に乗ったまま帆立の刺身の出来上がり。海水の薄い塩味が残ってなんとも甘い帆立。贅沢だと思う。

　学生がいると「魚当てクイズ」に始まり捌き方実習、刺身の切り方実習、ワカメしゃぶしゃぶ実演などが続き、2時間・3時間と魚屋さんでキャーキャー言いながら過ごしている。

　冷凍では無く、生きた魚をその場で食べることは「贅沢で豊か」だ。

取れた物は悪くならないうちにみんなで分けて食べる。どこの家でもその時期の旬な食材が並ぶ。余ったら他の家に持って行く。そういうお裾分け文化が生きている地域だ。

　人間関係も、時間の流れ方も、食材も、文化も豊かな地域、豊かな生き方だと思う。

いのちの尊厳のために

* 廃墟になってしまった気仙沼の港湾地区の元商店街を学生を連れて歩いていたら、一軒のビルに工事用シートが掛かっていた。見ると蒲鉾屋さんで、開店しているようだった。「この店再開したみたいだね。」と学生に言っていると後ろから「第一号で再開した店だよ。」と男性の声。学生を引率して来たと説明したら

「自衛隊とボランティア。その人たちのお陰で生きていくことができた。ありがたい。若い人の力は本当に大事だよ。本当にありがとう！」

未だ何もせず歩いていただけのわたしたちに、名前も知らないわたしたちに、お礼を言ってくださることに、学生たちも感激でした。若い力がこれからの復興にはどうしても必要です。それを学生たちに教えて下さいました。

2012年2月

豊かな生活とは

* 俺たちは何でも感謝して生きている。お風呂に入れる、ご飯が食べられる、ストーブがある、どんな小さなことにも感謝している。当たり前にあった物が全部無くなって、当たり前がどれだけありがたいことか知っている。
* あんたたちは、都会で何も不自由しないで生活している。物が沢山ある生活をしているけど、感謝することを知らないのでは無いか。そういう小さなことに感謝しているか？
* 今度東京の方で大きな地震があったら、俺たちみたいに生きて行くのは難しいだろう。ここではみんなが持っている物を出し合って生きてきた。奪い合うことも無いし、助け合わないと生きていけない。物に溢れていると感謝することも無いだろうし、みんなで分けるのも難しくないか？

（2013年3月）

いのちの尊厳のために

（未だ瓦礫の残る高田町を学生と歩いていた時、工事現場の人に呼び止められた）

　物に執着しちゃだめだ。一度逃げたのに物を取りに行って津波で死んだやつがたくさんいる。お金や物はあとでなんとでもなる。でも死んだらお仕舞いだ。命を大切にしろ。物に執着しちゃだめだ。

いのちの尊厳のために

停電で電気が点かなくても、ロウソクが一本あれば生活が出来る。ロウソクで生活して分かったのは、家族のありがたさだった。夕食の時、おにぎりしか無くても、ロウソクを１本立てておくと、ロウソクの周りに家族が集まってくる。みんなが一つのテーブルの周りに、顔がつくくらい、くっついて座る。携帯もテレビも使えないから、みんな寄ってきて話始める。

ロウソクの生活だった時、家族とこれまでで一番話しをした。お互いのことをありがたいと思った。

こんな何でもない家族との時間がとても貴重なことだと分かった。一緒に居て笑っていられればそれでいいんだ。

なぜ被災地に行くのか

東日本大震災の津波で、約６分間で1万8000人もの人が亡くなった。その魂が私たちに話しかけてくる。彼らはわれわれに対し、もっと内なる心に目をむけ、自分の今の姿とこれからなるであろう姿を見るように訴える。

全ての人にとってかけがえのない価値、全ての命が大切であるという主張、われわれは人類という一つの家族の仲間であるという根本的で必要な概念。われわれはこれら全ての話を伝えなければならない。

だからこそ、われわれは被災地に来たのだ。われわれが愛する人々のことを考えられるように。朝起きた子供たちの笑顔をまず考えられるように。食卓越しに、夫婦が優しく触れ合うことを考えられるように。両親の温かい抱擁を考えられるように。

われわれがこうしたことを考えるとき５年前にもここで同じように貴重な時間があったことを思い起こすことができる。亡くなった人々はわれわれと同じ人たちだ。

被災地は、悲しみと悲惨さの象徴としてでは無く、いのちの尊厳・ゆたかな生活をわれわれに気づかせる場として語り継がれる。

いのちの大切さ・学生の力

* バス停に高校生が立っている
* 大学生がスーパーで買い物をしている
* 学生と一緒にお店に来てくれた

何気ない日常がいかに素晴らしいことか、大切な瞬間か
『そこに居るだけでいい』『生きて、居ること』の素晴らしさ

成績も、スタイルも、何か出来ることを評価するのではなく、
名前すら必要のない、存在（being）そのものの価値を認める

陸前高田サテライトキャンパス

地域創生・人材育成等の推進に関する相互協力及び連携協定を締結しました。

本協定に基づき、陸前高田市を交えた三者は、同市及び三陸沿岸地域全体の復興と地域創生、またその地域創生を担う人材育成の推進に寄与することを目的として協議会を立ち上げ、陸前高田市内空き校舎の教育拠点としての活用や、シンポジウムや教育プログラムの協同実施の可能性などについて検討を行っていく予定です。



■ **協定の名称：**
「陸前高田市、岩手大学及び立教大学における地域創生・人材育成等の推進に関する相互協力及び連携協定」

立教大学は、2003 年度に矢作（やはぎ）町生出（おいで）地区において正課外教育の一環として「林業体験プログラム」をスタートし、陸前高田市との交流が始まりました。東日本大震災の発生を受け、2011 年 4 月に「東日本大震災復興支援本部」を設置。5 月には、同市を重点支援地域に指定し、2012 年に同市と連携・交流協定を締結しました。これまでに学生ボランティアに加え、スポーツ分野での交流プログラム、学部や留学生による復興支援プログラム等、のべ 1,000 名を超える学生が同市を訪問しました。そして、2015 年 10 月に発表した中長期ビジョン「RIKKYO VISION 2024」において、3 つの「バリュー（行動指針）」の一つである「Lead for Learning（自分を拓く）」のアクションプランとし

2017年4月

陸前高田市

廃校になる中学校

を活用して

サテライトキャンパス

を開設

ただ今鋭意準備中です!!